

1. 研究の背景

習熟度別学習から全体学習へ、またオーラル授業がなくなるという1年生からの授業形態の変化により、生徒の授業への取り組みが受け身で、消極的なものになり始めた。また理解度にも大きな差が見られるようになった。

英語授業の目的意識をはっきりと持ち、多人数であっても積極的に参加できる雰囲気を作ることで、英語を身につけようとする姿勢が見えてくるのではないかと考えた。

2. リサーチクエスト

自ら積極的に授業に参加し、考え、英語を理解しようとする授業の雰囲気をもどのようにすれば作り出すことができるか。

3. 予備調査（夏期研修後、調査対象クラスを2クラスから1クラスに限定した。）

（1）授業観察

授業への集中度や参加具合には差があるが、あまり意欲がない生徒でも、しなければならないことは最終的にはやる。明確な指示を与えれば、たいていの生徒は取り組む努力をする。

日本語訳にこだわり、英語よりも日本語を書く、日本語を理解することが英語を勉強することだと思っている生徒が少なくない。

音読練習では、読み方を知らない語が多いため、声を出すことを恥ずかしがる、それが更に読めないことにつながるという悪循環がある。読むことの意義を理解してカタカナをふっている者もいる。

（2）英語力について

初歩的・基本的な問題は解けるが、応用力は低い。テストでは、授業で取り扱った問題はできるが、変形すると解けない。語彙力には差があるが、全体的に教科書の新出単語以外の語にも知らない語は多い。

テストの点数は2年生の中では中程度であるが、問題の答えや日本語訳を暗記していれば解ける共通テストでは英語力を示すデータとしての信頼性はない。

音読する力に関しては、読み方を知らない語が多いため、声を出すことを恥ずかしがる、それが更に読めないことにつながるという悪循環である。

（3）授業に関するアンケート調査より問題と感じられた点

昨年度より教え方が変わったため、「わかりにくくなった」と答えた生徒・・・60%。

「習熟度別クラス授業の方が良かった」と答えた生徒・・・40%。

クラス内での「英語の力の差が大きいと思う」と答えた生徒・・・50%

その他目立った意見では、「発言がしにくい」「プリントが多すぎる」「細かい説明がほしい」等

授業に対して満足している生徒は少なく、また不満は多くとも、自ら「こうしたい!」という前向きな意見がほとんどなかった。

4. 仮説の設定

（1）音読練習を全員で何度も行う時間を毎回とれば、元気で統一感のあるクラスの雰囲気ができる。

（2）テストの内容を明確に、かつ早期に示すことで、早い時期から目的を持った学習ができるようになる。

5. 計画の実践

（1）学習内容の理解を、「訳読式」から「音読式」へ・・・口と耳を使う。

読むテストまでに、本文を暗記するほど読むことを目標とする。

→全員で読む、ペアで読む、時間を計って読む、訳を見て読む、等いろいろな読み方を1時間内に取り入れる。

リスニング小テストを毎時間2回行う。

→「導入」に復習として前回の内容を、「まとめ」にはその時間に学習した内容を聞き取るテストを行う。

（2）ねらいを明らかにしたテスト案を単元の最初に作り、それにたどりつく小テストを行う。

単元に入る前に、テスト範囲と内容の予定を伝える。

→最終的にこの単元を学ぶことで生徒が何を身につけることができるか、を考えたテストを作る。到達目標となるテストが先にあって、何を教えていけばよいのか、何を身につけさせればよいのか、ということを常に意識することができる。

毎時間の小テストを行う。

→語彙、内容理解、リスニング、本読みテストを様式や形体は変えずテストする内容のみ変えて習慣化させていく。

6. 実践の結果

(1) 音読練習を本格的に始めた当初は、一部の生徒しか声を出さなかったが、その生徒たちが大きな声を出して読み続けたことが、クラス全体の音読練習へと導いてくれた。声を出して読む生徒が多くなるにつれて、声を出しても恥ずかしくない、という雰囲気が出始め、たいていの生徒が口を動かすようになった。どうしても出せない生徒も、読んでいる箇所を目で追い、心で読んでいた。また、読めない単語にはカタカナふりをさせ始めたことから、さらに大きな声が出るようになった。リスニング小テストの本文を読む速度を次第に速めていったが、ついてこられるようになった。教科書の2ページ分は暗記できるようになり、覚えようとする積極的な姿勢が授業で見られ始めた。

(2) テストに何が出るか、が勉強の動機であるため、テストについてねらいを含めた詳しい説明をすることで、授業に前向きに取り組むという変化が見られるようになった。ポイントがわかっているだけで、板書だけでなく、大切だと感じることをメモし始めるようになった。また、毎時間の小テストは、少量の範囲で、簡単、そしてすぐに結果が出るものにした。合格ラインを突破することが、その授業の目標の1つとなってき、全員が真剣に取り組んだ。テスト範囲をやり方を変えて、くり返し学習することで定期考査や教科別テストまで何を勉強しているか意識しながら授業に参加する生徒が増えてきた。

7. 結果の検証(小テストの空白を利用したアンケートや単元後の授業評価より)

(1) 改善されたとと思われる点

リサーチ初期には、1文ずつ訳をしていくことへの執着があり反発もあったが、教科書をくり返し音読することは良かったと感じる生徒は70%近くになり、音読練習が英語を身につけるのに役立つと約80%の生徒が答えた。またカタカナふりをすることで英語が読めるようになったと感じる生徒が約90%であった。リスニングにはほとんど抵抗がなく、得意と答える生徒も増えた。

テストが、従来のものより難しくなった・解きにくくなったと答えた生徒は少なく、共通テストより良いという意見が増加した。小テストが定期考査への対策となったことや、早期からのテスト範囲・出題傾向等の説明と対策ドリル集が好評であった。テスト内容は教科書英文の熟読を基本としたものになり、共通テストより難しいかと思われたが、くり返すことで慣れ、半数の生徒が90点以上の高得点をねらう等テストへの自信と意欲が見られるようになった。

(2) 問題点

- 音読練習の自己評価で「声を出せなかった」と答えた生徒・・・42%

多くの生徒が音読練習の意義を理解し、以前より口を開け、大きな声が出せるようになったとはいえ、実際に「出している」と自覚している生徒はまだ半数である。

- テスト問題の形式で「得意」なものは「日本語訳・日本語で答える問題」と答えた生徒・・・約40%
「苦手」なものは「英作文」と答えた生徒・・・約40%

訳読式、日本語で答える問題に慣れているため、まだ英語テストへの意識を変えていく努力が必要である。

8. 成果と今後の課題

《成果》 英語授業は「訳」が目的ではない、という固定観念を取り除くことができたと思う。繰り返し声に出して読むこと、耳で聞くことが、次第に自然に英語を読める、理解できる、というつながりを作ることを授業の中で感じ始め、英語が「好き」「必要だと思う」という意識を持ってもらえるようになった。日本語訳をノートに書き写すことが授業だと信じていた時は、生徒の顔はノートと黒板を往復するだけであったが、今ではどのように発音するのか、どのような口の形をするのかを見るために生徒の頭は上がり、顔が私の方へ向くようになった。ノートや教科書には読み方がカタカナでところどころに書き込まれてある。英語授業は「音読」が基本だということを感じてもらえるようになった。

テストへ意欲的に取り組めるようになり、達成感を感じてもらえるようになった。繰り返しが多いため学習する範囲は狭くなったが、定着は良くなりテスト後もよく覚えている傾向が見られた。テストが生徒の英語力向上へと結びつくという責任を持って、目的を明確にしたテストを作るようになり、それが1回1回の授業のベースとなって工夫や改善を重ねる努力ができるようになった。リサーチのまとめとなるテストでは最も平均点が良く、生徒だけでなく自分の自信にもなった。

《課題》 声を出せない生徒が自然と読める雰囲気作りとその効果を実際に感じてもらえる工夫が必要である。また、ただ読む・聞くだけでなく、それらが内容理解へと自然につながるよう発展させたい。テストの内容については、小テスト、定期考査ともに1単元で、リスニング、語彙、内容理解、音読、といった観点別にし、一定性を持たせ、偏りのない力をつけさせたい。ただ点数を取ることが目的ではなく、テストまでの過程が大切であり、それも楽しみながら学習できるようにしたい。

【まとめ】

リサーチ前は本当に悩んでいた授業であったが、今では自分自身が楽しめる授業にすることができた。授業方法の変化に困惑する生徒の不満の声も聞かれたが、「継続は力なり!」と呪文を唱え試練を乗り越えてきて本当によかったと感じている。元気がなく、受け身で、授業時間をもてあまして多くの生徒たちを前に、焦りを感じていた時期からリサーチを始めた。途中、一体自分は何をしようとしているのだろうか?という疑問を抱き、さまようこともあったが、

そのような1つ1つの困難が、また自分を成長させてくれ、可能性を伸ばしてくれたのだと実感している。今回のリサーチをその他のクラスでも生かし、今後も常に問題意識を持ち、授業改善に努めたい。